

合格するには気持ちとタイミングが大事??

渡邊 幸太

1. 人生の迷路

私が教員採用試験に合格するまでは、本当に迷路をさまよった感じだ。好きなことをして、自ら迷いにいったともいえる。

私が小学校教員を志したのは、小学校の時だ。両親が教員だったことが、小学校の先生になりたいと思った理由のきっかけである。神戸学院大学を希望したのも、実家の香川県に近いこと、都会であること、小学校の免許を（親和女子大学で）取得できることだ。大学に入り、ゼミの今西先生との出会いや教職に関わってくださった方々の協力もあり、より一層小学校教員になりたいという気持ちが高まった。

しかし、「教職の専門的な知識も学びたい」と考え、兵庫教育大学大学院修士課程に進学した。これが自ら望んだ一つ目の迷路だ。大学とはちがった勉強、先生、仲間。とても楽しく意味のある2年間であった。

二つ目の迷路は、兵庫教育大学大学院博士課程への進学だ。そこでは、たくさん教育関係の論文を書いた。ただ、博士課程まで進学する友人は少なく、毎日パソコンと向かう日々が辛かった。

三つ目の迷路は、博士課程に通いながら、大学の非常勤職員として、また中学校の非常勤（補助的な立場）として働いたことだ。パソコンではなく、大学生や中学生と触れ合えることは、本当に楽しかった。また、自身の研究で小学校に出向くこともあり、小学生と触れ合える時も心が躍った。

四つ目の迷路は、小学校の臨時講師として働くことになったことだ。博士課程の担当教員が1年間海外で研究を行うことになり、そのタイミングで休学した。そこで、昔からの夢であった小学校の教員として働き始めたのだ。

2. 一次試験の勉強と二次試験の対策

小学校で働くのは1年と決め、教員採用試験を受けるつもりはなかった。しかし、同じ小学校で働く講師の先生は、採用試験を目指し必死に勉強していた。他の先生からの勧めもあり、失礼ながらも記念受験を受けることにした。もちろん、採用試験1日前の2時間の勉強では、一次試験に受かるわけもなかった。

次の年、私は2回目の採用試験に臨んだ。1年目の年、小学校で働くことの楽しさを感じ、博士課程を退学して小学校教員一本で働くことと決めたのだ。働きながらの勉強は本当に大変だった。そこで、苦手な教科を中心に勉強し、結果一次試験は合格した。迎えた二次試験。臨時講師をしていたこともあり、面接や模擬授業には自信があった。体育や音楽も得意であったため、自分の力を過信していた。結果は、不合格。

3回目の挑戦は、一次試験で不合格。教職教養の内容の変化が大きく、対策の不十分さを感じた。

迎えた4回目、ついに合格。それは、気持ちとタイミング。今年で30歳になることもあり、例年とは気持ちがちがった。絶対に今年で決めるという覚悟と決意。しかし、今年度はコロナの影響もあり、学校は忙しく、勉強時間は少なかった。そこで、ただがむしゃらに勉強するのではなく、1日30分集中して勉強した。時間には限りがあるので、これまでの試験の傾向をつかみ、予想し、効率的に勉強した。特別支援に関わる問題も増えていたため、問題数をこなすだけでなく、特別支援教育に関わる先生とたくさん話をして対策した。「計画」「対策」「予想」「集中」の大切さを感じた。勉強量も大事だが、質を上げることが重要である。関係のない話だが、趣味の筋トレは、1日1時間、勉強量よりも多かった。強い体と精神力も、勉強には大切…?

二次試験の対策について。得意な体育と音楽はあまり練習していない。それでも、自身の動きを動画撮影するなどして見返し、苦手なポイントは克服に努めた。一つ言えるのは、体育と音楽は試験での配点が少ないため、面接や模擬授業に時間をかける方が絶対に良いということ。ただ、当日の他の受験生の様子を見ると、配点が少ないからか苦手な種目を捨てているように感じた。確かに配点は少ないが、「できない」は良くない。「できる」方が良いし、まちががなく印象が良い。合否が僅差になると、そこでの差が命とりに!

面接練習は、色々な人に面接官役を依頼し、様々な角度から指摘してもらうのが良い。私も多くの人に面接練習をしていただいた。その中での3つのポイント。

1. 髪型、服装、話し方。当たり前だが、相手や回りのことを考えましょう。
2. いくら印象が良くても、この言葉や、この考えは良くないというもの。例えば、「いじめは仕方ない」という考え方など…。そこは、これを読んでいる皆さんに考えていただきたい。おそらく大丈夫。
3. 「子どもの気持ち」に寄り添うという考え方。私が2回目の二次試験で落ちたのは、おそらくこの考え方。自分の得意なことやできることを全面に押し出し、子どものことを考えていなかったのだ。得意なことやできることを発言するのは悪くないが、その良さをいかに子どもに還元できるのか、そこまで言う必要がある。学校や保護者のことを考えるのも大事だが、1年目の教員として大事なものは、まず「子ども」のことを考えられるかどうかである。ちなみに当日の面接官との相性も大事…。これも合否を分ける、その年のタイミング!?

模擬授業の練習の2つのポイント。

1. 各教科、範囲が多いので、時間がない人は授業を「パターン化」しよう。例えば、国語の詩の場合。多くの詩を勉強するのではなく、どの詩が出て、授業の流れは、
1. 音読 2. 連の確認 3. …。物語の場合は、1. 音読 2. 登場人物の確認 3. …など。「パターン化」すると、本番で見たことのない詩や物語が出て、安心して授業が進められるであろう。また、どの教科においても、導入→めあて→練習→活動→ふり返しをするなどの「パターン化」も有効であろう。
2. 子どものことを考えよう。面接のポイントでも挙げたように、まず子どもがいるこ

とを想定すること。この授業で子どもに何を学んでほしいのか、どのような活動が子どもにとってよいのか…。内容も大切であるが、指導案という教材観・児童生徒観・指導観のところが大切。子どものことを考えている先生として、「教壇に立つイメージができる」という印象を面接官に与えよう。

たくさんえらそうに書いたが、本当にこれらが正しいかは分からない。ただ、子どもと関わりを持つ職業において、「1番に子どものことを考える」ことは間違っていないと思っている。

3. これから先生を目指す人へ

4年間担任として働き、とても楽しくやりがいのある仕事であることは間違いないが、その反面、本当に忙しい。

小学校のある日の時間割。国語→習字→体育（プール）→外国語→算数→理科（実験）。国語・算数はともかく、習字・プール・外国語・実験…。教師自身のさまざまな知識や技能が求められる。プログラミング学習なども入り、4年目の今でも、授業で精一杯という1日がある。

そして、子どものことだけではなく、学校の組織として、保護者・地域・関係機関との連携・関わりも大切になってくる。毎日思いがけないようなことが起こったり、授業以外の仕事もあったり…。プレッシャーをかけるわけではないが、「中途半端な気持ちでできる仕事ではない」ということだけは、知っておいてほしい。

毎日忙しくはあるものの、それでもこの仕事を続けたいと思う。大変なこと以上に、子どもの成長、保護者や地域の人々からの感謝の言葉、同僚の先生とのつながり、これらが自身の仕事のやりがいにつながっている。題名に「気持ち」という言葉を入れたように、「本当に先生になりたい」「がんばりたい」という気持ちがある人には、ぜひとも先生になっていただきたい。そして、微力ながら応援させていただきたい。この合格体験記が、少しでも先生を目指している人の力になればと思う。いつか同じ現場で働きましょう。